

1 ペテロ 4:10-11、ローマ 12:6-8

神様は私たちの誕生のとき、特別な贈り物を私たちの内に備えてくださいました。それは、私たちのアイデンティティーの一部となりえるもの、またなるべきものです。私はこれこそが、神様があなたに受け止めてほしいと願っておられる目的だと思っています。

あなたの召し/目的を求めることは、神様があなたに用意された心躍る旅です。それは、生活費を稼いだり、ありふれた日々の危機をやりすごしたりという平凡なチャレンジを上回るものです。あなたの召しは、生きる目的と達成感を与える発電所のようなものです。人生のどんなチャレンジよりも、あなたを突き動かすものです。これは、信心深いということではなく、キリストのしもべであるということです。

あなたの住む社会の 10%、20%、30% またはそれ以上の人々が生きる目的を追求したならば、この世はどのようになると思いますか。この世は変えられるのでしょうか。残念ながらこの世は、ほとんどの人がアイデンティティーや目的を見つけられないでいる傷ついた世界です。本当の意味で生きておらず、ほとんどの時間をただやり過ごしているだけです。

私たちは明確な目的地を示した人生の地図を持って大人になるのではありません。明確な目的とそれに達するための計画を持っている人々がいるのに対し、目的がはっきりしないという人も多いです。

自分自身に聞いてみましょう。

「私は自らを突き動かし、力を与える、はっきりした方向性や目的を持っているだろうか。」

「毎朝、起きて、これをしたいと思う何かがあるだろうか。」

自分にとって何が大切か、また自分の人生で本当にしたいことは何かはっきりしているでしょうか。

あなたにとって本当に大切なことは何ですか。

一番やっていて楽しいと思うことは何ですか。

一番最近、心から満足したのは何をしていたときですか。

自分の目的、召しを理解・確立すると人生はどんなに変わることでしょうか。

あなたの目的を決める道へ一歩踏み出すごとに、そのゴールに近づいていくのです。

神様があなたに求めてほしいと願われる新しい方向に向かって、背中を押されるような感覚を覚えたことがある人がどれくらいおられるでしょうか。それなりの収入があって、快適な生活を送っているけれど、何となく心の中に、今の生活よりももっと何か自分には生きる目的があるのではないかと感じさせるものがあるのかもしれない。

アンケートによると、「何百万人もの人々、すなわち成人の約半数は自分の人生の意味や目的が未だにわからず模索しています。4人に3人の成人は世の中に変化をもたらしたい、何か後世に良い結果を残せるような生き方をしたいと思っています。しかし、さらに調査を進めると、その願望は将来体験したい希望であって、現実ではないということがわかっています。言い換えれば、私たちの多くは本当の意味で達成感を与えてくれる人生の目的を知らないのです。」(マシュー・バーネット著『あなたの中にある目的』33-34 ページ)

私は、自分には大したことはできないと言う多くの人と話をします。彼らには、特別な才能はなく、教育を受けていない人もいます。自分のこともちゃんとできないこともあると言います。他の人を助ける時間がなかったり、また興味がないという人もいます。

このような態度は少し横柄です。なぜなら、こう言う人は自分の力に頼っているか、人生で成功する唯一の方法は自分のことをきちんとすることだと考えているからです。このような人は、自分の能力を通して自分自身を見ることで成功した人生かどうかが決まると思っていることがわかります。彼らは霊の目を覚まさせなければなりません。目指すべきは、神様がくださったものを使って人生を最高のものにすることです。

そして、目指すべきは、壮大な教会を建てることではありません。それは、神様のなさることです。私たちの召しは、本当に優れた人々を建て上げることです。ほっとしましたか。建て上げるのは神様で、私たちは忠実に、神様が備えてくださった賜物を使うように召されているだけなのです。

神様は、人気や体裁に気を取られない人を愛されます。神様は、私たちの神様との関係や他の人との関係に興味を持っておられます。みことばで示しておられる通りです。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。…あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」
まず一步目は、自分の意志を神様に明け渡すことです。神様は私たちにとって最善をご存知です。

全てを理解してからでない、何もしないという人がいます。あなたの賜物と目的を探し、目的を果たすことは、それではうまくいきません。神様は徐々に明らかにされることがよくあるです。神様はまず、あなたの人生の旅のスタートに必要な分だけお見せになります。あなたが受け入れられるだけのものを見せて、そこから徐々にふさわしい時に明らかにしていけます。私たちは全部を見せられても対応できませんから、これは理にかなっていません。神様が全てをお見せになれば、私たちは信仰によって歩まなくなるでしょうし、あまりに圧倒されて、目標を追い求めなくなるかもしれません。

私たちが事故だとか罪だとか呼ぶものでも、神様は人間の体験を無駄にされないと私は強く信じています。苦しみを最小限に抑え、私たちの人生の罪や痛みをなかったことにして忘れるために私たちは自分の道から外れます。私たちはしばしば、自分の過去と現在を引き離したいと思います。ローマ 8:28 は特にその通りです。私たちの目的は、山の頂上にいるときではなく、もっとも低い谷底にいるときに表されることが良くあります。私たちの「目的」は、私たちが告白する罪から流れ出すこともあります。

「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の言葉をしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」(1コリント 15:1-2)

霊的賜物…これは、何世代も多くの教会で普通に話されなくなったものです。

まずはじめに、霊的賜物はクリスチャンが持っている賜物/才能で、神様があがめられるため、またクリスチャンの働きの中で仕えるために使われるものだということを言わせてください。

霊的賜物について聞かなくなったり、話さなくなった理由の一つは、西洋の教会が自由主義に走り、人々が聖書は神様のみことばであるということ信じなくなってしまう、真理に触れた人がそれによって変えられなくなったからです。

多くの人にとって、神様よりも自分の必要や欲望が、信仰体験の中心にきてしまっています。人々は、神様は宇宙規模の自動販売機のように私たちに祝福し、必要を満たしてくれるためだけに存在すると考えていることが良くあるのです。

多くの場合、人々は信仰の人ではなくなっています。今までとは逆のやり方で、教会は人々に信仰の人でなくてもいいということ言ってきたのです。私たちの共依存の文化によって、他の誰かがやってくれるだろう、他の人が責任をとってくれるだろうという考えに私たちは説得されてしまっています。多くのクリスチャンは

宗教色の濃い礼拝や建物が必要だと考えていますが、信徒の人格の変化の必要を唱える人はほとんどいません。ですが、福音は、変化だらけですー救い(暗闇から光へ)、聖化(御霊における成長)。

教会出席者の数で成功かどうかを見ようとする人もいます。その多くは、キリストに似た者へと変えられているかを見分ける指標になる聖書の信仰を持っていません。

牧師であり、作家ある人の体験した苦労をお話したいと思います。彼は教会の何かがおかしいと気が付きました。大体は問題ないけれど、何か違って、「この教会に足りないものは何ですか。」と聞いて回りました。「イエス・キリストが教会におられないとき、それは私たちと共におられないということです。人々は、私たちのうちにキリストを見ることができません。私たちは教会をして、行事を企画して、人々が救われているけれど、彼らにほとんど変化が見られませんでした。私たちは人々に真理を示していたけれど、彼らが変わるように導いてはいなかったのです。」

10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

多くのクリスチャンの抱える問題の一つは、ビュッフェでどれを食べようか選んで歩く客のように、この真理を一口、あれを一口とつまんでいることです。多くの教会がこの状況にに応じているのが現状です。多くの人にとって、神様ではなく私たちの必要が信仰の中心になってしまっています。神様は自分を祝福し、必要を満たしてくださるためだけに存在しておられると考えていることが良くあります。

私ごとですが、私は物をプレゼントするのが苦手です。しかし、私たちには、完璧なプレゼントをして下さる神様がられます。それらのプレゼントはいつも正しく、目的があって、ふさわしいものです。神様はあなたが気付く前に、あなたの必要をご存知なので、あなたにふさわしいものをくださいます。すべての人は特別なプレゼント/賜物をいただいていると私は信じています。だから賜物を何も持っていないと言える人は一人もいません。

ここでいう賜物とは、お互いに仕えるのに有効な賜物のことです。

まとめるとこうなります。自らをクリスチャンだという人はみな、次の3つのことをして教会の働きに仕えることを求められています。一つ目は、霊的賜物/情熱/目的と神様の召し/生きる目的を見つけることです。二つ目は、仕えるために、教会の牧師や長老から訓練を受けることです。そして三つ目は仕える者の心を育てる事です。これら三つの点には議論の余地はありません。

聖書の中には、霊的賜物について長く説明している箇所もありますが、1ペテロ 4:10-11の二節は次の三つの質問に端的に答えています。

- ・与えるお方とその賜物
- ・霊的賜物と人間関係の関連性
- ・霊的賜物の使い方

これら三つの質問は、今朝のメッセージに編み込まれています。

与えるお方とその賜物

ペテロが「それぞれ」と言っていますが、これは全ての信徒という意味です。ペテロは全ての信徒がそれぞれ霊的賜物を持っているという前提で、どのようにその賜物を使うかを話しています。

では、私たちはそれぞれ何を受けるのでしょうか。ペテロは何の話をしているのでしょうか。

ギリシャ語では、日本語にもなっている「カリスマ」と言う言葉です。しかし年を経て、この言葉の意味は変わりました。霊的賜物は、人を自分に惹きつける能力のことではありません。

この言葉は新約聖書では違う意味で用いられています。救いの賜物という使い方もされていて、一番良く知られているのはローマ 6:23 です。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。「無償の贈り物」というのが「カリスマ」です。これは確かにすべてのクリスチャンに与えられる賜物です。しかし、この箇所ではペテロが言っているのはそのことではありません。人に仕えることで救いをどのように使うことができるのでしょうか。

他には、「カリスマ」が「祝福」と同じ意味で使われているところもあります。特に、敵から救われる祝福のことです。

カリスマ

カリスマという言葉の意味は、全世界で共通ではありません。新約聖書にはこの言葉が 17 回出てきますが、そのうち 16 回がパウロ、1 回がペテロ (1 ペテロ 4:10) によって使われています。パウロのこの言葉の使い方は幅が広すぎて、一つの意味ではおさまりません。

あまり専門的な話は避けたいのですが、良く知られた神学者の視点と教えから、カリスマという言葉の意味を見極めたいと思います。

カリスマという言葉についての議論でとても素晴らしいのが、マックス・ターナーの「霊的賜物の昔と今」(福音の声 15(1985): 7-64) です。

ターナーの結論は、パウロの賜物のリストは「明らかに規則性がなく、不完全です。もしパウロの目的が、賜物は神様から与えられたものと示すことなら、パウロは、教会を建て上げるために神様が人を用いておられると見て取れるものは何でも、カリスマと定めたでしょう。」(31 ページ)

また、D.A. カーソン「御霊をあらわす」(グラント・ラピッツ、ベイカー社出版、1987 年、19ff) やウェイン・グルーデム「組織神学」(グラント・ラピッツ、ゾンダーバン社出版、1994 年、52 章) も、よく似た結論を出しています。

ウェイン・グルーデムは「霊的賜物とは聖霊によって与えられた能力のことで、教会のどの働きにおいても用いられる。」(52 章) と言っています。グルーデムは「これは広義の意味で(教える、憐れむ、管理運営するなど) 自然な能力と(預言する、癒す、霊を見分けるなど) 奇蹟的で、自然な能力とは見られないものの両方を含みます。」と言っています。これは、パウロが霊的賜物をリストアップした時に(ローマ 12:6-8、1 コリント 7:7、12:8-10、28、エペソ 4:11)、どちらの賜物も含んだからです。しかし、人が持つ自然な能力すべてがリストに載っているわけではありません。なぜなら、パウロは、すべての霊的賜物は「同一の御霊」(1 コリント 12:11) によって、「みな益となるために」(1 コリント 12:7) 与えられ、「すべてのことを、徳を高めるために」(1 コリント 14:26) し、「教会を建て上げるために」しなければならないとはっきりわかっていたからです。

この例が 2 コリント 1:11 にあります。「あなたがたも祈りによって、私たちが助けて協力してくださるでしょう。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。」

ペテロは、パウロがローマ 12 章、1 コリント 12 章で用いたのと同じように「カリスマ」という言葉を使っています。

「⁴さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。…⁷みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。」(1 コリント 12:4&7)

「⁶私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。⁷奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。⁸勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」(ローマ 12:6-8)

これらの聖書箇所は、賜物が信徒ひとりひとりに与えられているというペテロの発言を裏付けています。与えられている賜物は人によって異なりますが、一つ一つが御霊の現われです。御霊は真のクリスチャンに賜物を与えになることで、ご自身を現わされます。

贈り物の種類、それに込められている愛情、また贈り物の持つ目的、これらは贈り主についてたくさんのお話を語っていませんか。贈り物はそれを贈った人の性質をあらわにしますね。霊的賜物もそうです。霊的賜物は神様のご性質を現わすのです。

これが霊的賜物の幅です。それぞれの信徒に御霊が異なる形で現れておられるのです。

人間関係における霊的賜物

もう一度10節を読みましょう。

10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。

人は価値観を共有する他人と有意義な関係を持つ必要があります。教会は、人が御国の目的を達成するために、自ら進んで人間関係を作るコミュニティです。そこで私たちは働きかけ、また働きを受けます。

教会のコミュニティが、奉仕は一方通行であるべきだと考えるようになると、それは不健全な交わりになります。

「働き/ミニストリー」という言葉を聞いて、あなたはそれが自分がすることだと思いませんか、または、あなたのためになされるものだと思いませんか。

あなたの答えがどちらも「はい」であることを願います。どちらかだけではなく、両方です。教会は、あなたが霊的賜物を用いて他の人に仕え、他の人が霊的賜物を用いてあなたに仕える場です。

もし、仕えたくないと思っているなら、それは問題です。また、他の人があなたのために仕えてほしくないと思っているなら、それも問題です。どちらも必要だからです。

霊的賜物の使い方

では、霊的賜物はどのように使えばよいのでしょうか。1ペテロ4:10は「***それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。***」と言っています。また1コリント12:7は「***みな***の益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられています。」と言っています。では、まず間違った使い方を見ていきましょう。

霊的賜物は自分のプライドを満たすために使うべきではありません。人は、神様が与えてくださった賜物を大げさに見せて人に自慢したいという誘惑にかられます。もし、口で言わなくても、「神様が指導の賜物をこの私に下さったのだから、助ける賜物を持っている〇〇さんより私の方が重要なんだ。」と考えたい誘惑にかられます。しかし、そのような考え方は完全に間違っていて、そういう人は霊的賜物の目的を理解できていません。私たちには、同じ御霊の現われが与えられているのです。神様のご性質全てを現わすことの出来る人はいませんが、私たちが協力することで、神様のご性質がもっとはっきりと現わされるようになります。

この意味で、すべての霊的賜物は重要です。また、すべての賜物はキリストのからだに必要で、一つの御霊によって、同じ目的のために与えられました。すべての賜物が御霊を現わし、すべての賜物が、**神様の目的**を達成するためにともに働きます。ですから、霊的賜物は個人のプライドのためにあるではありません。霊的賜物は個人のためではなく、「**みな**の益のため」であり、「互いに仕え合う」ために与えられています。私たち

の成長を示すものは、どれだけ賜物が優れているかではなく、どれだけキリストに似ているかです。私たちの成長を示すものは、御霊の賜物の現われではなく、御霊の実—愛、喜び、平安、忍耐、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

霊的賜物は人に仕えるために与えられているものです。1ペテロ 4:10 はこう言い換えることができます。「あなたがたはみな、いただいた賜物を使ってお互いに仕え合いなさい。」

「仕える」という言葉から「執事」という言葉が生まれました。執事は一般的には「給仕」という意味で使われる言葉です。ここでも同じ意味だと思えます。給仕が整えられた食事を客に出すように、神様からいただいている賜物を私たちはお互いに捧げるべきです。個人のプライドのためではありません。食事を準備したのは給仕ではありません。食事を自分にとって置いてはいけません。そのために賜物が与えられているのではないのです。むしろ、神様の恵みを人々に運ぶという素晴らしい役割をいただいていることを喜びましょう。私たちに賜物が与えられているのは、それを他の人に分け与えるためです。霊的賜物も体を構成するメンバーにそれを分け与えるために与えられているのです。私たちが分け与えているものの性質を少し考えてみてください。10節の最後に賜物を用いて、互いに仕え合いなさいとありますが、これは、いろいろな側面を持つ神様の恵みを良く管理するということです。

大切な点がわかりますか。あなたが受け取った霊的賜物は、他の人に分け与えるために神様が備えられた恵みの一面なのです。ですから、あなたが賜物をキリストのからだの他の人の益となるために使うなら、あなたは神様の恵みを人々に分け与える神様の代理人であり、神様の給仕なのです。

ですから、私たちは神様の恵みを分け与えるために霊的賜物を用います。では、どれが私たちがどのようにその恵みを分け与えることを示しているのでしょうか。11節の前半にその答えがあります。「語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。」

結論：霊的賜物の究極の目的は何か。

最後に霊的賜物の究極の目的を考えましょう。それは、ペテロが11節後半に記しています。「それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。」

私たちはキリストのからだを建て上げるために霊的賜物を用いなければなりません。しかし、それは私たちが霊的賜物を与えられた究極の目的ではありません。究極の目的は素晴らしい働きを通して人を助けることではないのです。究極の目的は、神様があがめられるためです。この聖句は大切なことを明らかにしています。

「それは」と始めることで、ペテロは霊的賜物の使用に関して、究極の目的を伝えようとしています。私たちが賜物を使うのは、すべてのことにおいて、つまりすべての賜物、すべての御霊の現われにおいて、イエス・キリストを通して神様があがめられるためなのです。

なぜ私たちが霊的賜物を欲すべきでしょうか。私たちは霊的賜物を喜ぶべきです。なぜなら、それらによって他の人、つまり信者も未信者も、さらに神様ご自身の役に立つからです。これが霊的賜物を喜ぶ主な理由です。神様の家族の一員として、地域の教会の会員になることはいただいた霊的賜物を会衆の成長のために用いますという誓いも含まれます。これが教会の中心を成しているべきです。